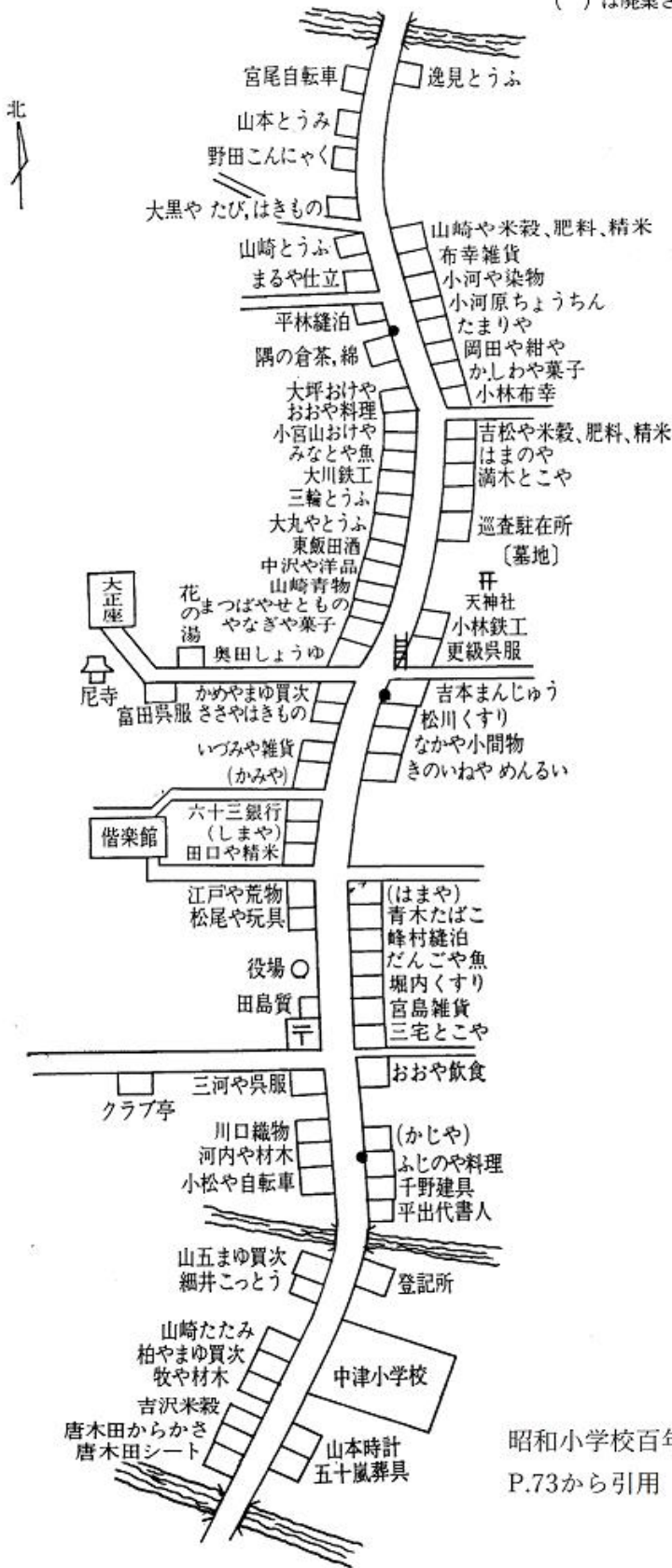


大正初期の北原商店街

●は共同井戸、■は火の見やぐら
()は廃業されていた



昭和小学校百年史
P.73から引用

旧北国街道(市道 330 号線)の
移り変わりと昔の町並み・屋号

旧北国街道は佐久の追分で中山道から分かれ、小諸・上田・屋代(矢代)・篠ノ井・南原・北原・上氷鉦・丹波島・長野を経て、越後高田に至り、そこで北陸道に合し、出雲崎に至る街道であった。越後(新潟)の御用蠟(ローソク)や佐渡の金を江戸(東京)に運ぶ道であり、また北陸の諸大名の参勤交代(諸大名が交代で自分の領地を離れ江戸に出て幕府に勤めること)や、善光寺参詣者の通り道として、もっとも重要な街道であった。慶長 11 年(1606)、にこの街道が丹波島通り(丹波島橋経由)に付け替えられて、小市橋経由の古舟渡大道の北国西街道が篠ノ井追分で合流するようになると、北国街道を通る旅人が急激に増加し、また周辺の人々も街道沿線に移り住み、茶店や、旅籠(宿屋)などが軒を並べにぎわってきた。

北原延命大仏殿(薬師堂)・南原の蓮香寺の吞龍上人さんなどが招致されたのもその後で、唯念寺(寺町組)の寺宝を旅人に拝観させたとの話しも言い伝えられている。

明治 11 年(1878)9 月、明治天皇北陸御巡幸の際には、東北信御巡幸の道筋にもなった。街道には、御小休止所(やすんだところ)、御膳水所(おしょくじをしたところ)跡などがところどころに残っている。

北原のゑびす講

大正初期から昭和 10 年頃(1935)までの約 10 年間は、北原区が最も活気に満ち、にぎわいを見せた時期といわれた。中でもゑびす講は、最も景気を付け、にぎわいを見せた。

そのころの北原区は、川中島平の政治・経済・文化の中心地で近郷近在の人達からは「お町」といわれ羨望視されていた。北原区は旧北国街道(当時は国道 5 号線)沿いに南北約 1 キロに亘り、両側に 180 戸余りが軒を連ねていた。区が目抜き通りには、中津村役場をはじめ、小学校・郵便局・登記所・取調室や留置場のある警察分署・六三銀行・信用組合・中部電力散宿所など数多くの官公署が点在していた。文化・娯楽面では、劇場大正座・共同浴場延命の湯・80 畳敷の大広間があり、芸妓 10 人余り抱えた料理屋偕楽館・若いきれいな女給さんがいたカフェールプス・それに居酒屋・食堂など、日常生活に関係ある商店が 100 戸余り軒を連ねて区内は常に物の売り買いの人や馬の往来で終日にぎわい活気に満ちていた。

このような日常生活の世相の中で、北原商工会(会員 100 余名、会頭数本春治郎氏)は、年末年始をはじめ春秋祭・お盆・収穫後のゑびす講時に、「大売り出し」をしたが、特にゑびす講の大売り出しは、一年中の最も大きな行事で、北原商工会を中心に区を挙げて取り組み、一年中の商売の善し悪しはもちろん区民の生活もゑびす講の売り上げ如何といわれ、区財政にも大きく影響した。

ゑびす講の大売り出しは、秋の取り入れが一段落した 11 月 10 日を初日として 20 日が中日で 24 日が千秋楽日として 15 日間連日行われた。このため、北原商工会では、11 月に入るや早々に会頭さんを先頭に連日準備に取りかかり、まず区の中央の東飯田酒店(中沢や洋品=現(株)中澤屋)の二部屋を借用し、天神社から御神体を遷座した(注:御神体は、出雲大社から分神したもので、「五穀豊穰」と「商売繁昌」を願う福の神様として崇められていたものであった)。福の神を神棚に安置しその横に、大売り出しの福引の 1 等~3 等までの本賞用のガラス箱入高さ一寸三分(約 3.36cm)の金箱のゑびす大黒様の縁起物を安置し、前面に四斗入酒樽と米俵三俵の(一俵 60kg 入)1 等の副賞が二段重ねで積み上げられ、両側には等級入りの清酒・炭俵・農機具(鍬・鎌・ぼて・かご)・お勝手用具(なべ・かま・包丁・茶わんなど)・野菜・果物・たわし・マッチ・つけぎ・あめ・菓子など雑貨や日用品が陳列された。一年中のお引き立てに感謝をこめてお応えすべく、空くじなしの景品が山と景気よく積み飾られた。一方宣伝は、11 月 5 日から、東は小島田・下氷鉦・丹波島・西は、七二会・小田切・信里・小松原・犀口・岡田、南は篠ノ井高田・会村まで、連日チンドンヤを繰り出し、大売り出しのピラを配り宣伝し、客の呼び込みを行い、さらに、北原区南北入口と目抜き通りには、「北原商工会大売り出し」と白地に赤で染め抜いた大きな横断幕を張り、それぞれの店では店内一杯に商品を並べ、大安売りの幕や安売り商品名・値段を書いた色とりどりのチラシ・ピラを吊り下げ客を待った。

夜になると、百燭光の電球を上町・仲町・下町に分けて 10 個以上も点灯し、各商店は商工会独自で作った花模様入の大形堤灯を店先に点灯し、北原区内は昼夜の別なく明るかった。

また、朝昼夕の 3 回、大正座前で三段雷の花火を打ち上げ、景品付大売り出し福引の始まったことを知らせ、北原区内はゑびす講一色で連日大にぎわいであった。

11 月 18 日から、いよいよ福引きが始まり本番に入り、人出が日毎に多くなり、遠く西山地区(七二会・信里・小田切)から穀物(そば・粟・きび)や大豆・あずき・麻・麻がらなど馬に積んできて、穀屋・雑貨屋(和泉屋・布幸店・吉松屋など)に売りさばき、帰りにそのお金で生活用品を買って帰る人や馬が後を絶たず、福引所の東飯田酒店前は行列が続き、通り抜けできないような有様で交通整理に役員は汗だくだった。大売り出し期間中 50 銭買い上げ毎に福引券 1 枚で、福引券二枚(1 円以上)でくじ引券 1 枚贈呈、くじ 1 本(紙により等級が書いてある)が引け、1 等~10 等までの大小の景品が当たり、1 等から 3 等が当たると係員が大きなリンを振り周辺に知らせ、本賞に箱入金箱のゑびす大黒様・副賞に米俵一俵・酒樽が与えられた。大人も子どもも、大変な楽しみで 1 等~3 等の縁起物のゑびす大黒様が当たると家中で神棚に飾り、お祝いしたもので、今でも家には当時の金の大黒様が神棚に安置されている。

懐かしい思い出の「お祭り」や「ゑびす講」の行事も、終戦後、社会機構・経済変革・世相観の移り変わりにより、昭和

20 年後は催行されず途絶えて、特に爰びす講の御神体である分神(大国主命)も日の目を見る事なく、大仏殿の奥に安置されており昔を偲び感無量である。

(出典：川中島町北原区の「ふるさと歴史探訪」P.P.40-41、P.P.202-204 より一部抜粋)